

子どもの造形表現にみる住空間の変容と家族像

山川 真樹 ・ 石川 誠

(大阪市立第二工芸高等学校, 平成18年度京都教育大学大学院修了) (京都教育大学)

Change in Living Space and Family Image Based on Children's Representation

Maki YAMAKAWA ・ Makoto ISHIKAWA

2007年11月30日受理

抄録: 本稿は、「家族」及び、その「家族」が生活をする場である「住空間」との具体的な関わり合いを通して表れてくる「家族像」と、子どもの造形表現の中に表れてくる「家族像」とを関連させて論じた。そこから社会状況の変化が、家族の生活スタイルを象徴する住空間に反映され、そのことが子どもの造形表現に一定の力学として働いていることを指摘した。

キーワード: 子ども, 造形表現, 家族像, 住空間

I. 序

戦後の子どもの表現を概観すると、ある変容に気づかされる。この表現に影響を与える要素としては、メディアを始めとした様々な要因が挙げられよう。戦後の経済の高度成長により暮らしが大きく変わり、離婚率の上昇、非婚化・晩婚化・少子化といった社会の変容が起こっており、家族のあり方も多様化してきている。このような社会背景の変化、そしてそれに伴う家族の変化もまた、子どもの造形表現のありように影響を与える一つの要因ではないだろうか。

家族と教育の関わりについては、教育学者の藤田英典(1988)が次のように指摘している。「戦後日本の家族は、子どもを共同体的な地域社会から引き離し、プライベートな家庭の中の中心的な存在にしてきた。近代の家族と学校は、伝統的な共同体から子どもを隔離し、囲い込んできた。部分的に外部化された子どもの教育をめぐって、さまざまな矛盾と葛藤が顕在化し始めており、その調整を強いられている」¹⁾ 戦後の経済的発展の中で、子どもは私的な「核家族」の中に囲い込まれ、地域社会との連帯を薄めていくこととなった。これらのことは、子どもの造形表現にも何らかの影響を与えたと推察される。

家族について、森岡清美(1983)は、「夫婦・親子・きょうだいなど少数の近親者を主要な成員とし、成員相互の深い感情的かかわりで結ばれた、幸福(well-being)追求の集団である」²⁾と述べている。家族が幸福追求の集団であるとするれば、子どもの視点を通して表出した「家族像」(家族が描かれている作品)にも、その時代ごとの世相を反映した家族の理想型が現れると考えられる。

住空間について建築家の香山壽夫(1996)は、「建築芸術は、現実の生活空間において、現実の生活空間として、成立する芸術です」³⁾と述べている。とりわけ、住居は家族という人の営みが多分に関わってくるものである。これらのことから、本研究の目的を、以下のように設定した。

- ① 家族や生活空間の変容が、子どもの造形表現にどのように表れるかを明らかにすること
- ② 住空間にみられる家族像の変容を把握すること
- ③ 上記①②から両者の家族像がどのように重なり合って表れるか、相互の関係を明らかにすること

研究方法としては、子どもの造形表現の変容を、戦後発行された、図画工作の教科書及び美術教育雑誌に掲載された児童作品を収集し、一方、住空間の変容を建築専門誌から収集し、それらの時代における相関性について検討することとした。

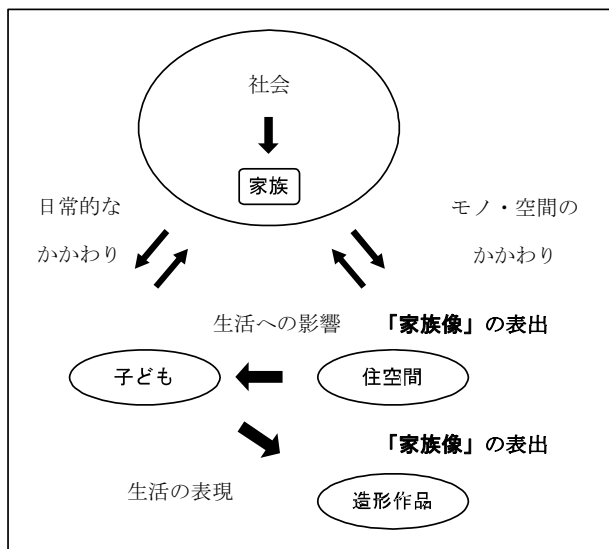
Ⅱ. 子どもの造形表現に表れた家族をめぐる概念

子どもの表現には、風景を表したものや夢・願望・ファンタジーなどの物語を表したもの、生活を表したもの、等に分けることができる。その中で、子どもの家族生活における出来事については「生活画」において如実にみとることが出来るため、本研究では、子どもの表現の中でも「生活画」に注目することとした。宮武辰夫が、著書『幼児の絵は生活している』の中で、「幼児の絵こそは、彼らの生活の記録であり、心意の表現なのである。」⁴⁾と述べているように、子どもの自発的表現は、その子どもの生活の中から生まれてくるといってらえと同一線上にある。

一方、生活の母体である住空間は、家族の現実の生活が具体的に表れる。家族を客観的にみる指標となるもので、住空間はほとんど唯一の具体的な空間であると考えている。

よって、本研究では、子どもの造形表現である「生活画」から見出せる家族像と、住空間から見出せる家族像を分析しながら、その相関性をさぐっていく。子どもの造形表現に関する家族をめぐる概念を図に示す(図1)。社会の変容がその時代の家族の生活にも影響を与え、住まい方として住空間に表れる。その時代に暮らす子どもたちにも生活への影響が及び、それが出来事の表象として造形表現に表れる。

また、社会構造の変化を考察する際に、時代の大きな節目として、昭和48(1973)年に起こったオイルショックは見のがせない。よって、大きな時代区分を、オイルショック以前「高度経済成長・住宅の大量供給時代」・オイルショック以後「経済の低迷期・需要の個別化時代」として論じる。



※ 図1 筆者が考える「子どもの造形表現に表れた家族」をめぐる概念

Ⅲ. 子どもの造形表現と住空間の分析

1. 研究の手続き

(1) 子どもの造形表現に関する研究の手続き

小学校1年生から小学校6年生までの各学年の、図画工作教科書(日本文教出版)・美術教育雑誌『教育美術』に掲載された子どもの作品の中で家族関係が描かれているものを抽出した。

これらの作品を、教科書の出版時期に応じて、時代を区分しながら分析していく。その際、子どもの造形表現の中でモチーフとして登場する人物が家族の中でも「誰」なのか、そして表れる「場所」がどこであるのか、描かれている人物が「何をしている」のかについて着目して分析した。

(2) 住空間に関する研究の手続き

住空間については、建築専門誌『新建築』『建築文化』『新住宅』などから戸建て住宅及び集合住宅作品を抽

出し、分析していく。共用スペースと個室との関係から、「食べる」「寝る」「憩う」という暮らし方のスタイルがどう変化して、空間に表れてくるのか、また外部空間との関わりについては、住居の中でどの居室を外部に開いているのか、隣近所との共用の領域はどこなのか、ということに着目し、それらの空間構成が、時代背景とどのように関わっているのかについて分析した。

2. 結果と考察

戦後から現代にかけての図画工作科教科書や雑誌、住空間にみられる家族像について三つの視点から全体的な考察を行う。

(1) 教科書・美術教育雑誌にみられる家族像

「高度経済成長・住宅の大量供給時代」においても、「経済の低迷期・需要の個別化時代」においても、家族の出現頻度は年を経るごとに減少している。コンクールの作品はさらに家族のでてくる割合が少ない(図 2・3・4・5)。この要因としては、核家族の影響で、大勢で食卓を囲んだりする機会が減ったことや夫婦共働きの家庭が増加したこと、また、受験競争が過熱化したため、小学校の頃から塾に通う子どもが増え、食事を外でとる機会が増えたことなどが考えられる。高度経済成長期頃から、よりよい進路のために学歴を身につけようとする風潮が広まり、大学受験競争が活発になった。この風潮が現在もなお、つづいているといえる。他にも、ライフスタイルが変化し、子どもたちの興味・関心が時代と共に、多方面へと移り変わっていったことや、教育現場における指導でも、扱う題材が絵画や彫刻、デザインの分野だけでなく造形遊びも扱うようになったことも、家族が描かれる頻度が減少した一つの要因であると思われる。

家族の生活空間の出現率については、住居・仕事場以外の公共空間が描かれる割合が、時代が進むにつれ増加している(図 6・表 1・表 2)。「高度経済成長・住宅の大量供給時代」に、カー・カラーテレビ・クーラーが三種の神器となり、多くの情報の入手ができるようになり、移動手段も増えた。このことからレジャーに行く家族が増え、子どもの造形表現にもそれが表れている(図 7・8・9・10)。「経済の低迷期・需要の個別化時代」においては、レジャー施設に加え、ショッピングセンターや飲食店の出現がみられた(図 11・12・13・14)。これは、都市化の影響や食の外部化が進んだからであると考えられる。

祖父母の出現率については、「高度経済成長・住宅の大量供給時代」の第Ⅰ期と「経済の低迷期・需要の個別化時代」の第Ⅱ期にそれぞれみられる(図 15・表 3・図 16・図 17)が、この二つの時代で描かれる祖父母の意味合いは違うと考えられる。「高度経済成長・住宅の大量供給時代」では家庭での様子が描かれていたが(図 18)、「経済の低迷期・需要の個別化時代」では家庭内以外の医療施設や老人福祉施設での出現がみられた(図 19)。ここにも、やはり核家族の影響が表れており、核家族化が進むことにより単身で暮らす高齢者が増加し、家族の支援が得られにくくなったことが原因として考えられる。従来の老人ホームに加え、コレクティブハウジング⁵⁾やグループリビング⁶⁾等、家族以外の住まい方が多様化してきたことも原因の一つではないだろうか。

家事労働の出現率については、「高度経済成長・住宅の大量供給時代」の第Ⅲ期の教科書において、描かれている割合が増加している(図 20・表 4)が、これは母親がこの時期、専業主婦化⁷⁾することが多かったことが関係していると考えられる(図 21・図 22)。「経済の低迷期・需要の個別化時代」では、家事労働が描かれること自体が少なくなっている(表 5)。これは、家事自体あまり行われなくなったこと、母親も働きに出る家庭が増えたことが要因の一つではないかと思われる(図 23・図 24)。

まとめると以下ようになる。

- 「高度経済成長・住宅の大量供給時代」においても、「経済の低迷期・需要の個別化時代」においても、家

族の出現頻度は年を経るごとに減少している→核家族の影響、夫婦共働きの家庭の増加

- 住居・仕事場以外の公共空間が描かれる割合が、時代が進むにつれ増加→レジャー施設の増加、都市化の影響
- 「経済の低迷期・需要の個別化時代」において祖父母の出現が、家庭内以外の医療施設や老人福祉施設でみられた→高齢化の影響
- 家事労働の出現率について、「高度経済成長・住宅の大量供給時代」の第Ⅲ期の教科書において、描かれている割合が増加→専業主婦化の影響
- 「経済の低迷期・需要の個別化時代」では、家事労働が描かれること自体が少なくなっている。→夫婦共働きの影響

(2) 住空間の変容にみられる家族像

持ち家率（95年調査）によると、一人世帯が24%であるのに対して二人世帯は62%と大幅に持ち家率が上がっている。この結果より、家族の存在が、住まいを手に入れようという強い動機になっていることがわかる。人々がマイホームを求めようとする理由として、戦後政府が持ち家政策をとってきたということ、そして企業もそれをバックアップしてきたということがある。当初は、住宅事情の悪化に起因して進められていた政策が、次第に質を重視するようになり、家族の幸福を実現する手段が住宅になっていったと考えられる。これは、ダイニング・キッチンやステンレス流し台の登場（図23）、そして1950年代に主流であった中廊下型から1960年代以降の家族全体が集まる室として、リビングを中心にするという、「居間中心型」へと志向が変化してきたことにも表れている（図24）。さらに、バブル期は、生活をファッションという尺度でみる傾向が強くなった。住宅に関しても「本来地域の独自性を表現していた住宅のデザインは影をひそめてファッションに変わり、新しい住宅地は万国旗をひろげたような百鬼昼行の景観に変わってきた。その混乱は「百花斉放」といえるかどうか。」⁸⁾と西山卯三は述べている。他者との差や、ブランド感を持つことが住居を選ぶ際にも重要になってきた。

一方で、自分らしい暮らし方を求めて、コーポラティブ方式で家を建てる人や（図25）、フレキシビリティのある暮らし方を求める人（図26）、また住居を職場にする人も「経済の低迷期・需要の個別化時代」から表れるようになった（図27）。家族の構成に関しても、これまでの夫婦二人と子ども二人というような、標準的な家族のあり方だけではなく、高齢の単身者や子どもがいない夫婦だけというように、多様である。こうして、多様な生活スタイルに対応した住居が登場してきた。ただ、多くのマンションや住宅ではnLDKという形式がまだ一般的である。

また、他の住民との関わり方については、「経済の低迷期・需要の個別化時代」では、共用で使用できるスペースを利用しながら互いに交流をはかっているという姿勢がみられた（図28）。これまでの地域社会との関わりとは違った形でのコミュニケーションの手段を、建築の中にも仕掛けていくことが、今後ますます増えていくのではないだろうか。

また、高齢化社会に伴い、単身の高齢者が孤立せずにサービスを受けられるような仕組みを今後ますます考えていく必要がある。集合住宅内に介護の為の施設を設けたり、病院と連携ができたり、近所の人々がみんなで見守れるように開放的なつくりをしたりと、様々な工夫がなされてきている。

まとめると以下のようなようになる。

- 1950年代に主流であった中廊下型から1960年代以降の家族全体が集まる室として、リビングを中心にするという、「居間中心型」へと志向が変化→家族の幸福を実現する手段が住宅になっていった
- 「高度経済成長・住宅の大量供給時代」にダイニング・キッチンやステンレス流し台の登場→台所が住居の中でも中心となる場所になった
- 「経済の低迷期・需要の個別化時代」にみられたコーポラティブ方式、共用で使用できるスペースを利用しながら互いに交流をはかっているという姿勢、介護の為に施設→建築の中にも人と人との繋がりを生み出す仕掛けがみられる

(3) 子どもの造形表現と住空間の関わり

子どもの造形表現と住空間のどちらからも、その時代ごとの生活を通して表れてくる家族の姿を見出すことができた。

時代が進むにつれ、母親が働きに出かける家庭が増え、必然的に家事にかかる時間は短縮されている。家事とは、炊事・洗濯・掃除はもちろん、家の中のあらゆる作業のことである。住宅の近代化の過程でもっとも変化の著しいところは、おそらく台所であると思われる。「高度経済成長・住宅の大量供給時代」に、団地を通して全国に広まったDK平面では、作る場と食べる場の機能性を高めている。この頃から台所は主婦の場と位置付けられ、同時にすまいはより、家族のためのものとなった。一方で、食の外部化・簡便化もみられるようになる。子どもの造形表現においても食事に関連がある表現は「高度経済成長・住宅の大量供給時代」においては家庭の食卓や台所で、「経済の低迷期・需要の個別化時代」においては、食卓・台所と回転寿司屋などの外食の様子ともに描かれるようになっていた。食料消費支出に占める外部化比率の推移⁹⁾をみても、「経済の低迷期・需要の個別化時代」は単独世帯の増加、女性雇用者の増加等社会情勢の変化の中で、調理や食事を家の外に依存する食の外部化が進展し、簡便化志向が高まっていることがわかる（図29）。

住居において、居間は家庭の中での団欒の場の象徴となったが、子どもの造形表現における団欒の場は、家族の生活空間以外の公共空間である場合が多かった。子どもの造形表現では、家族が描かれる割合が減少する一方で、家族の描かれる場所は、家族の生活空間以外の公共空間が描かれる割合が増加している。この二つの関係はまさに裏腹の関係であるといえる。公共空間で描かれる家族は「高度経済成長・住宅の大量供給時代」においてはレジャー施設、「経済の低迷期・需要の個別化時代」においてはレジャー施設に加えて、ショッピングセンターや飲食店であった。

高齢化の影響については、子どもが祖父母を家庭生活の中で描かなくなったという傾向と、実際に同じ住居で住む機会がなくなったことと関連づけて考えることが出来る。介護においても外部化がおこり、老人福祉施設や医療施設での様子が子どもの造形表現にみられた。住居においても、単身の高齢者がサービスを受けられるような仕組みやコレクティブハウジングやグループリビングといった試みがみられた。

以上の結果から、日常生活のあらゆる面での外部化が、子どもの造形表現にもあらわれているといえる。

IV. 結論

本研究により、社会の状況の変化が子どもの造形表現に一定の力学として反映していることが見出され、またそれぞれの時代ごとの家族の生活スタイルの変容が、子どもの造形表現や住空間にも表れていた。そして子どもの造形表現と住空間のそれぞれから見出せる「家族像」に高い相関性がみられた。本研究の目的は以下の

①～③であった。このそれぞれの結論について具体的に述べる。

- ① 家族や生活空間の変容が、子どもの造形表現にどのように表れるかを明らかにすること
- ② 住空間にみられる家族像の変容を把握すること
- ③ 上記①②から両者の家族像がどのように重なり合って表れるか、その相関性を明らかにすること

まず、①について、小学校図画工作教科書（日本文教出版）と美術教育雑誌（教育美術）から導き出された結果についてまとめる（表6）。

表6 教科書・美術教育雑誌にみられる家族像

子どもの造形表現	その時代の社会状況
「高度経済成長・住宅の大量供給時代」においても、「経済の低迷期・需要の個別化時代」においても、家族の出現頻度は年を経るごとに減少	核家族の影響 夫婦共働きの家庭の増加
住居・仕事場以外の公共空間が描かれる割合が、時代が進むにつれ増加	レジャー施設の増加 都市化の影響
「経済の低迷期・需要の個別化時代」において祖父母の出現が、家庭内以外の医療施設や老人福祉施設でみられた	高齢化の影響
家事労働の出現率について、「高度経済成長・住宅の大量供給時代」の第Ⅲ期の教科書において、描かれている割合が増加	専業主婦化の影響
「経済の低迷期・需要の個別化時代」では、家事労働が描かれること自体が少なくなっている	夫婦共働きの影響

次に②について、住空間から導き出された結果をまとめると、以下のようになる（表7）。

表7 住空間の変容から導き出された結果

住空間	結果
1950年代に主流であった中廊下型から1960年代以降の家族全体が集まる室として、リビングを中心にするという、「居間中心型」へと志向が変化	家族の幸福を実現する手段が住宅になっていった
「高度経済成長・住宅の大量供給時代」にダイニング・キッチンやステンレス流し台の登場	台所が住居の中でも中心となる場所になった
「経済の低迷期・需要の個別化時代」にコーポラティブ方式や共用で利用できるスペースを利用しながら互いに交流をはかっているという姿勢、介護の為の施設がみられた	建築の中にも人と人との繋がりを生み出す仕掛けが取り入れられるようになった

これらのことから、家族にとって住居の価値が高まったことがわかり、住居平面をみることで、家族がどういった生活を理想としていたのか、どういった家族でありたかったのかを読みとることが出来た。

最後に③の子どもの造形表現と住空間の関わりについてまとめると、第一に、母親の家庭内での役割の変化や高齢化の影響、団欒の場の変化が子どもの造形表現と住空間のどちらともに影響を与え、時代ごとに家族像を見出すことが出来たということ。第二に、日常生活でのあらゆる面での外部化の影響（育児の外部化・食の外部化・介護の外部化など）が、子どもの造形表現と住宅平面に表れていたということである。

具体的に例を挙げると、子どもの造形表現において、家族の生活空間以外の公共空間が描かれる割合が増加したことは、団欒の場が家庭内ではなく、レジャー施設やショッピングセンター・飲食店に取って代わったことを意味する。また、食の外部化により、子どもの造形表現に家事が描かれる割合が減り、住居平面においても台所がコンパクト化しているという現象がみられた。

子どもの造形表現に、家族内での役割の変化や人間関係の変化が表出しているということは、子どもの造形表現における発想の源が、家庭生活からの影響を多分に受けているということだろう。また、万博の様子やショッピングセンターを描いたものなど、直接家族が描かれていない子どもの造形作品からも、それが描かれている背景からは、家族の存在を垣間見ることが出来る。日常生活での家族との関わりが子どもの心象風景となつて、造形表現に表れたのではないだろうか。そして、その日常に大きく関わりがあるのが住居である。

また、今回の調査により、予想以上に子どもの表現の中に家族が描かれているものが少なかったこともわかった。家族との関係は極めて日常的なものなので、子どもの日々の日記などが入手出来たなら、また結果が違っていたのかもしれない。しかし、今回の調査である一定の傾向を見出せたという点では成果が出せたのではないかと考えている。そして、本研究を通して、子どもの表現を生む背景となるものは様々な「体験」であり、そこから表現が生まれてくるということも確認できた。その体験を通して養われる「豊かな心」が子どもたちの成長にとって大切なものである。

また、近年家族が多様になり、ライフスタイルも一つの形式に縛られなくなってきたが、そんな時代であるからこそ「学校」が地域の中で中心となって、暮らしの支援や子育ての相談の場として機能していくことが必要である。新たなコミュニティの場として、学校が地域に参画していく場面が、今後ますます増えていくだろう。

本研究の今後の課題を述べると、今回の調査・分析結果は調査対象の標本数が少数な為、今後、より多角的な調査が必要であると言える。また、農村部と都市部では、経済・産業の状況に相違があるので一概に全ての地域で今回のような結論が出せるとは言えないが、ただ、教科書は全国的に指標となる作品が掲載されているといえるので、ある一定の傾向を見出すことが出来ると考えている。そして、今回、調査対象として絵画作品が主であったのは、家族や生活の様子がより明確に分析できるという理由であった。今後は、他の形態での作品も調査の対象にしていきたい。さらに、『教育美術』だけでなく、児童作品を掲載している他の美術教育雑誌などの資料も調査対象としていきたいと考えている。

なお、本稿は山川の着想に基づいて、研究の構想や方法について、山川と石川が協議し、資料収集や執筆を山川が行った。

【図・表】

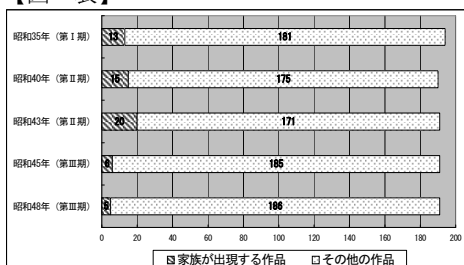


図2 「高度経済成長・住宅の大量供給時代」の教科書作品における家族の出現数
※ 小学校の各改訂年でみた作品点数とその内訳

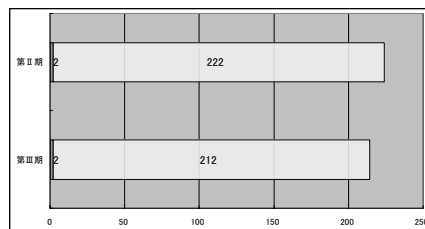


図3 「高度経済成長・住宅の大量供給時代」の雑誌『教育美術』における家族の出現数
※ 小学校の全学年にわたる作品点数とその内訳

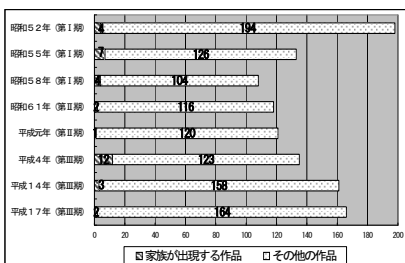


図4 「経済の低迷期・需要の個別化時代」の教科書作品における家族の出現数
※ 小学校の各改訂年でみた全学年にわたる作品点数とその内訳

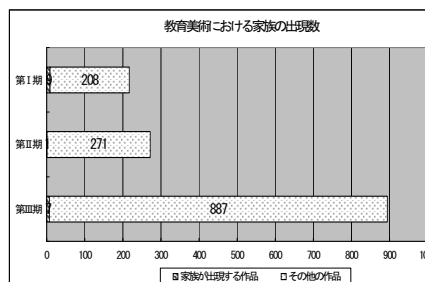


図5 「経済の低迷期・需要の個別化時代」の雑誌『教育美術』における家族の出現数
※ 小学校の全学年にわたる作品点数とその内訳

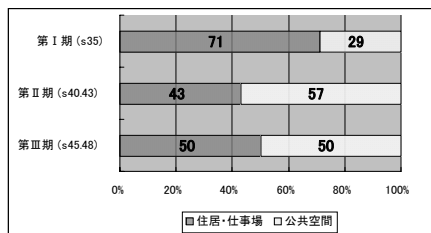


図6 「高度経済成長・住宅の大量供給時代」の教科書作品における住居・仕事場と公共空間の出現する割合

表1 「高度経済成長・住宅の大量供給時代」の美術教育雑誌における住居・仕事場の出現する割合

期	年代	教育美術
第Ⅱ期	(S40, S43) (1965～1969)	2/2
第Ⅲ期	(S45, S48) (1970～1976)	1/2

表2 「経済の低迷期・需要の個別化時代」の教科書・美術教育雑誌における住居・仕事場の割合

期	年代	図画工作教科書	教育美術
第Ⅰ期	(S52, S55, S58) (1977～1985)	5/13	5/9
第Ⅱ期	(S61, H元) (1986～1991)	1/3	1/1
第Ⅲ期	(H4, H17) (1992～2005)	0/17	2/6

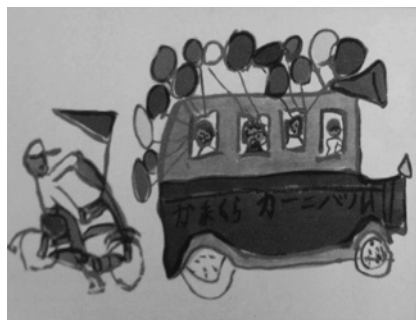


図7 昭和35年『図画工作』1年生教科書
作者と父親と友人で、街のカーニバルを観に出かけている場面



図8 昭和40年『図画工作』3年生教科書
作者がサーカスの公演を観ている場面。



図9 昭和40年『図画工作』2年生教科書
作者と弟が、遊園地で木馬に乗っている場面。



図10 昭和48年『図画工作』4年生教科書
作者が休みの日に釣りをしている場面。



図11 (左) 平成4年『図画工作』2年生教科書
作者がディスカウントショップに買い物にきた場面。

図12 (右) 平成11年『教育美術』4年生作品
行ってみたいショッピングセンターを描いた場面。





図 13 平成 11 年『教育美術』4 年生作品
町のショッピングセンターを描いた場面。



図 14 平成 6 年『教育美術』4 年生作品
回転ずし店に父親と訪れている場面。

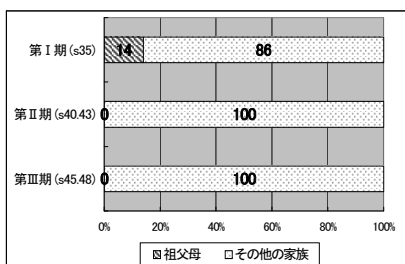


図 15 「高度経済成長・住宅の大量供給時代」
の教科書作品における祖父母の出現率

表 3 「高度経済成長・住宅の大量供給時代」の美術教育雑誌における祖父母の割合

		教育美術
第 II 期	(S40, S43) (1965-1969)	0/2
第 III 期	(S45, S48) (1970-1976)	1/2

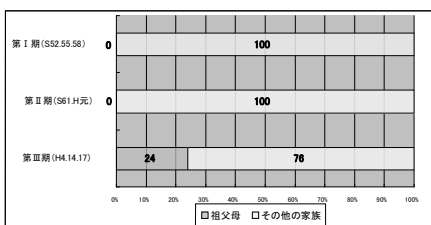


図 16 「経済の低迷期・需要の個別化時代」の
教科書作品における祖父母の出現率

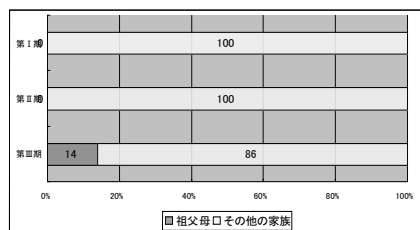


図 17 「経済の低迷期・需要の個別化時代」の
雑誌『教育美術』における祖父母の出現率



図 18 昭和 45 年『教育美術』4 年生作品
祖母の横顔を描いた場面。



図 19 平成 14 年『図画工作』5・6 年生
教科書
祖父母が医療福祉施設にいる場面。

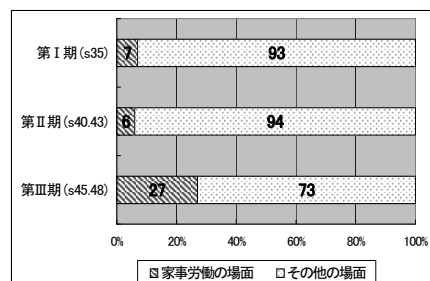


図 20 「高度経済成長・住宅の大量供給時代」の教科書作品における
家事労働の割合

表4 「高度経済成長・住宅の大量供給時代」の美術教育雑誌における家事労働の割合

			教育美術
第Ⅱ期	(S40, S43)	(1965～1969)	0/2
第Ⅲ期	(S45, S48)	(1970～1976)	0/2

表5 「経済の低迷期・需要の個別化時代」の教科書・美術教育雑誌における家事労働の割合

			図画工作教科書	教育美術
第Ⅰ期	(S52, S55, S58)	(1977～1985)	0/13	4/9
第Ⅱ期	(S61, H元)	(1986～1991)	1/3	0/1
第Ⅲ期	(H4, H17)	(1992～2005)	1/17	0/6



図21 昭和35年『図画工作』1年生教科書
作者が台所で母親の手伝いをしている場面。



図22 昭和48年『図画工作』1年生教科書
母親が台所で調理している場面。

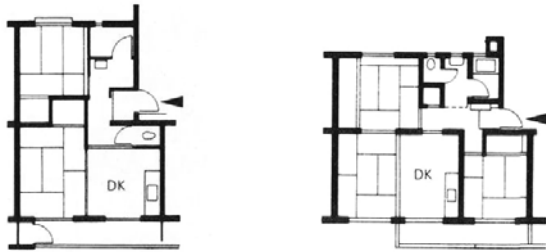


図23 51C型住宅の平面 ※設計資料集成より

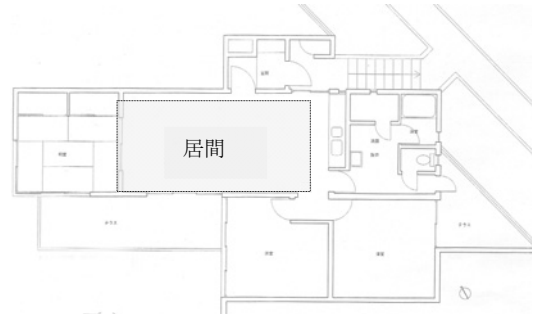


図24 桜台コートビレッジ 設計者：内井昭蔵 ※新建築より

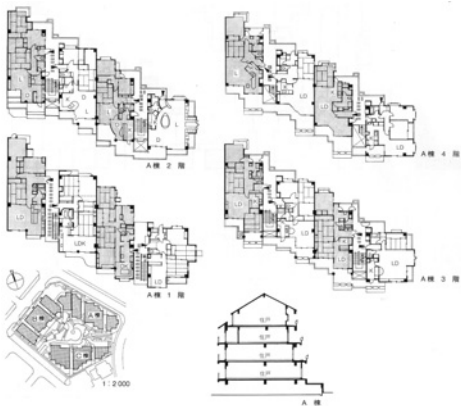


図25 ユーコート 設計者：京の家創り会設計集団 ※設計資料集成より

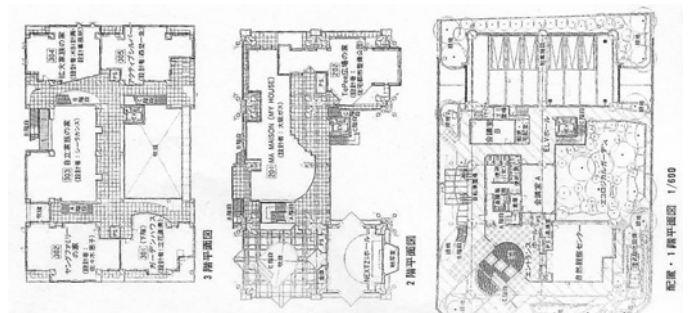


図26 NEXT21
設計者：大阪ガスNEXT21建設委員会
(総括；内田祥哉，集工社建築都市デザイン研究所
※建築設計資料より

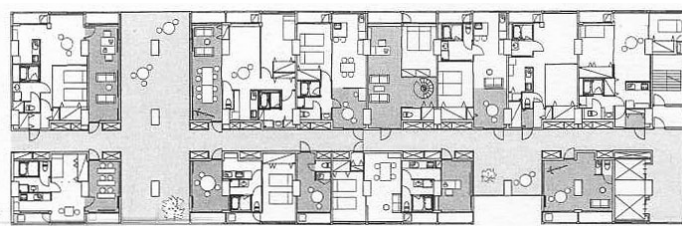


図 27 東雲チャンネルコート 設計者：山本理顕 ※新建築



図 28 コモンシティ星田 設計者：坂本一成，加藤設計，大阪府住宅供給公社 ※設計資料集成より

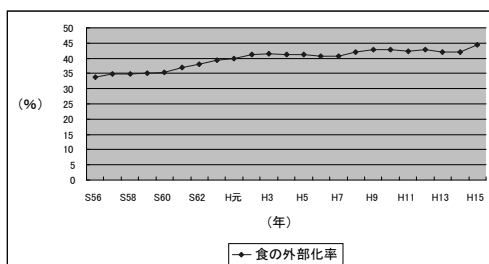


図 29 食料消費支出に占める外部化率の推移 食育白書より作成

■ 註及び引用文献

- 1) 藤田英典「教育政策と家族（Ⅰ）近代家族の展開と教育-戦後マイホーム主義を中心として-」『わが国の家族と制度・政策に関する研究』総合開発研究機構，1988，p.18 および p.21
- 2) 岡清美「家族をどうとらえるか」森岡清美・望月嵩編『新しい家族社会学』培風館，2006年2月6日，p.4
- 3) 香山壽夫「建築意匠講義」東京大学出版会，1996，p.9
- 4) 宮武辰夫『幼児の絵は生活している』（改訂新版），文化書房博文社，2000，p.37
- 5) 個人の住宅部分とは別に，ダイニングキッチン・リビング等居住者同士が交流し，支えあう共同の空間を兼ね備えた集合住宅のこと。
- 6) 高齢者の身体機能の低下を補うため，5～9人の居住者がお互いの生活を共同化・合理化して共同で住まう一定の居住形式のこと。
- 7) 高度成長期以降，1980年代前半までは，普通のサラリーマンと結婚してもある程度生活水準の上昇を望めたこともあり，女性の生き方は，専業主婦化することが多数派であった。
- 8) 西山卯三「すまい考今学—現代日本住宅史」彰国社，1989年12月10日，p.379
- 9) 平成18年版食育白書『食育推進にいたる背景と取組の本格化—年次報告書の第1回作成に当たって』
<http://www8.cao.go.jp/syokuiku/whitepaper/2006/book/html/06sh0101011.html>

■ 図版出典

- 図 7 日本児童美術研究会『図画工作 1』日本文教出版，昭和35年5月
- 図 8 日本児童美術研究会『図画工作 3』日本文教出版，昭和41年1月
- 図 9 日本児童美術研究会『図画工作 2』日本文教出版，昭和41年1月
- 図 10 日本児童美術研究会『図画工作 4』日本文教出版，昭和48年3月
- 図 11 日本児童美術研究会『図画工作 2』日本文教出版，平成3年4月
- 図 12 教育美術振興会『教育美術 2月号』，平成11年2月
- 図 13 教育美術振興会『教育美術 2月号』，平成11年2月
- 図 14 教育美術振興会『教育美術 2月号』，平成6年2月
- 図 18 教育美術振興会『教育美術 2月号』，昭和45年2月
- 図 19 日本児童美術研究会『図画工作 5・6上』日本文教出版，平成13年3月
- 図 21 日本児童美術研究会『図画工作 1』日本文教出版，昭和35年5月
- 図 22 日本児童美術研究会『図画工作 1』日本文教出版，昭和48年3月
- 図 23 日本建築学会『設計資料集成』丸善，2000年2月
- 図 24 新建築社『新建築』2001年3月
- 図 25 日本建築学会『設計資料集成』丸善，2000年2月
- 図 26 建築資料研究社『建築設計資料 S I住宅—集合住宅のスケルトン・インフィル』2005年6月
- 図 27 新建築社『新建築』2002年4月
- 図 28 日本建築学会『設計資料集成』丸善，2000年2月

